

●阿江美恵子さん（東京女子体育大学 教員）

「ダンスなど特定の競技に限定しない女性スポーツ全般を考える団体に入りたい」と思っていたところ、タイミング良く、WSFジャパンを知ったそうです。

WSFジャパンの活動については「ジャーナリズムの目からしか見ていないのが少し残念です。メンバーに研究者がもっと多く加わって、研究会のようなものができればうれしい」とのこと。

大学ではスポーツ心理学、体育心理学を教える阿江さん。「女性競技者を単に競技者として育成するのではなく、一人前の大人に育成する教育プログラムを作成すること、女性に限らずスポーツの地位を向上させること」が最近のテーマだそうです。

●宮本慶子さん（東京体育館職員）

三ツ谷さん（WSFジャパン代表）に指導者のための研修会の講師をお願いしたのが、入会のキッカケだそうです。WSFジャパンには「会員をもっと増やし、スポーツ界に影響を与えるような組織になってほしい」と要望。

現在、「マラソン、水泳、陸上などの女性の記録はどこまで伸ばせるか」「生理学と女性のスポーツ」などに関

心を持っているそうです。四月に駒沢体育館から異動し東京体育館に移り、事業普及係として、「都民のスポーツ振興」に取り組んでいます。

●福田富昭さん（全日本女子レスリング連盟理事長）

「本業の会社（株・ユニマットコーポレーション）の方が忙しくてなかなかスポーツにさく時間がなくて残念」と福田さん。理事長を務める全日本女子レスリングは、八月にブルガリアで開催された世界選手権で六連覇の快挙です。連盟の設立とともに入会。「WSF

Hot Line

会員の広場

ジャパンはもっと活動を活発にしなければ。今のままでは会員として不満。オリンピックのすべての種目に女子が参加できるように努力してほしい」とのお言葉をいただきました。

●宮川比登美さん（フィットネス 指導者）

フィットネスクラブもスイミングクラブもない、という神奈川県三浦市で、地域の人々の健康作りに励む宮川さん。その地道な努力が評価され、先ごろミズノ・ベストフィットネスインストラクター「フィットネス貢献賞」

を受賞されました。（おめでとうございます）

女性スポーツフォーラム開催時に「超音波で骨密度を測定した」という、雑誌「フィジーク」の小さな記事でWSFジャパンの存在を知り、さらに「文句を言うより行動を」という三ツ谷さんの言葉が宮川さんの心に響き、入会を決めたそうです。「あゆみを見るとすごいことをやっているのに、WSFジャパンのことを知らない人が多くて残念」との感想。

現在は「中高年以降の心と身体」

とくにメンタルな部分に関心をお持ちのことです。

●吉中康子さん（京都文化短期大学 助教）

短大では「スポーツとフィットネス」「女性と健康」「スポーツと経済学」「二十一世紀を生きる女性の役割」などの講義を担当している吉中さん。地域の体操教室では二十代から七十五歳までの生徒さんの指導にあたっています。そこでは成人病の予防のためのプログラムを実施。「大変、効果をあげている」そうです。

WSFジャパンに対しては「女性が学ぶ機会、能力を発揮できる機会を作り出して、固定的役割分担から開放され、健全な社会や家庭が存在し、健全なスポーツが浸透するよう努めてほしい」。また、「組織力を駆使して世界各国の情報が得られればうれしい。たまには大阪でも行事が開催されればいいのですが」という注文もいただきました。

●後藤忠弘さん（フリースポーツライター）

東京新聞の記者から九十二年、フリーのスポーツライターに。広島アジア大会では報道担当官として舞台を支えました。

後藤さんはかねてから、親しくしていた米国WSFの創設者B・G・キング夫人の考えや行動力に注目、一九七〇年代初めのスポーツ界における自身の勉強のテーマとしていたそうです。たまたま三ツ谷さんが母校の後輩であったことなどもあり昨年、WSFジャパンへ入会されました。

WSFジャパンには「活動基金を確保することが一番の問題。電通などと相談したらいと思う。またスポーツの世界にとどまることなく、他の分野の同様な運動グループと協力提携して、活動を広げ、大きな流れをつくることを期待しています」とのことです。